

第5回 超高齢社会の到来に向けた地域包括ケアシステムのあり方検討会議 議事録

日時： 令和2年3月23日（月）18:00～19:30

会場： ソリッドスクエア西館1階 会議室3

出席者：

■委員（五十音順）

- 秋山美紀（慶應義塾大学環境情報学部教授）
- 金井利之（東京大学大学院法学政治学研究科教授）
- 坂元 昇（川崎市看護短期大学学長）
- 柴田範子（特定非営利活動法人楽理事長）
- 関口博仁（公益財団法人川崎市医師会副会長）
- 中澤 伸（社会福祉財団法人川崎聖風福祉会事業推進部長）

欠席者：

- 石山麗子（国際医療福祉大学大学院医療福祉経営専攻教授）
- 落合明美（一般財団法人高齢者在宅財団企画部長）
- 後藤 純（東京大学高齢社会総合研究機構特任講師）
- 堀田聡子（慶應義塾大学大学院健康マネジメント研究科教授）

■事務局

- 健康福祉局地域包括ケア推進室（ケアシステム担当、地域福祉担当、地域保健担当、専門支援担当）
- こども未来局総務部企画課（地域包括ケア推進室兼務）
- 健康福祉局長寿社会部
- 健康福祉局保健所健康増進課、健康福祉局医療保健医療政策室地域医療担当

議事：

1. 中間報告書について
2. 各テーマに関する施策の現状整理について
3. 地域課題の解決に向けた地域マネジメント推進事業実施・研究について
4. 最終報告の取りまとめに向けて
5. その他

【議事要旨】

1. 中間報告書について 及び 2. 各テーマに関する施策の現状整理について
 - i. 事務局説明
資料2「超高齢社会の到来に向けた地域包括ケアシステムのあり方検討会議中間報告(概要)」

資料3「超高齢社会の到来に向けた地域包括ケアシステムのあり方検討会議中間報告(概要)」
資料4「各テーマに関する施策の現状整理について」
に基づき、事務局より説明。

ii. 討議

- ・ 今回の検討会議で挙げた議論を取りまとめ、川崎市いきいき長寿プランに反映を行う試みであると理解している。委員意見が多岐にわたり、かつ内容として膨大であるため、長寿プランの策定協議会において、その会議に参加した委員に理解できるものになっているのかやや疑問が残る。本検討会議の議論を分かりやすく施策に反映するために、取りまとめ方の工夫が必要なのではないか。(関口委員)
 - 頂いた意見が施策に反映されるよう、ポイントを絞るよう検討する。(事務局)
- ・ 本検討会議の内容に基づいて策定協議会へ提案する、という位置づけを明確にすれば、議論からピックアップすべき内容を絞りやすいのではないか。取りまとめた検討結果がどう活用されるのか、という点は明確にしていきたい。(中澤委員)
- ・ 緻密に意見を整理していただき感謝している。一方で、各テーマの「(1)現状と議論のポイント」「(2)議論から見えてきた課題と方向性」における重点項目の関連性が分かりにくくなっているのではないか。(秋山委員)
 - (1)(2)間の関連性等については、事務局内で検討したい。(事務局)

3. 地域課題の解決に向けた地域マネジメント推進事業実施・研究について

i. 事務局説明

資料5「地域課題の解決に向けた地域マネジメント推進事業実施・研究について」に基づき、事務局より説明。

ii. 討議

- ・ 幸区の市営住宅でカフェ活動を行っている。最初は何をしたらいいのかという悩みが挙がっていたが、集まるうちに様々な意見が出ており、今後の団地の展開が期待できる。また、人数の増加に伴い男性の参加もみられ、カフェは人が人を呼ぶ場になっている。コロナウイルスの影響でこれまで来ていた人が地域との繋がりが断たれてしまうことを懸念しているが、気に掛ける関係づくりにも繋がっていると感じる。一方で、大きなマンションにおける取組にはネットワークの組みづらさ等の点で課題を感じることもある。(柴田委員)
- ・ 地域包括支援センターで実施する地域ケア会議で扱う事例は支援の困難性や問題点などネガティブな視点になりやすいが、強みを発見するような視点が出てくる事例があれば紹介いただきたい。他地域との比較により自分たちの地域の強みに気づき、モチベーションに繋がることもあると考える。(中澤委員)
 - 地域マネジメントを推進し、見守り支援センター等の取組を行う中で、自地域の強みを発見することが重要であるという意見には納得するところがある。(事務局)

- 幸区の市営住宅の活動の中から、近隣の団地との交流・考え方の共有がみられるようになった。若い世代が活動に参加するようになるという効果もみられた。(柴田委員)
 - 若い女性をどう集めたのか。(事務局)
 - 活動が半年過ぎたころから、参加者が少しずつ働きかけを行った結果ではないかと考えている。若い世代も「そろそろ私たちの世代だから」と言っている。(柴田委員)
 - 他の事例では若い世代を参加させたい、任せたいという思いが強すぎてかえって若い世代に敬遠されている場合もある。本件の場合、若い世代に対するアプローチが良かったのではないかと。(中澤委員)

4. 最終報告の取りまとめに向けて

i. 事務局説明

資料6「超高齢社会の到来に向けた地域包括ケアシステムのあり方検討会議方向書(案)」に基づき、事務局より説明。

ii. 討議

- 今後の方向性という位置づけで取りまとめがされているが、何年先まで見据えた方向性なのか。2025年とすると、計画策定で終わってしまうのではないかと。報告書の図19も、どのくらいの将来を想定するかによって内容や意味するものが変わってくると思われる。(金井委員)
 - 当座は2025年を目標としている。しかし、川崎市の高齢化のピークは2025年以降に来るため、より先のことも考える必要があると認識している。推計の部分は国の政策動向も考慮する必要があり、また公表にあたっては一定の正確性が期待されるため、検討を進め精査したい。(事務局)
- 地域包括ケア連絡協議会について、最初は高齢者のみを対象としていたが、高齢者施策の汎用性に着目し、支援を必要とする全ての人を対象とした点は素晴らしく、実現できればかなり住みやすい街になると思われる。実行にあたっては困難も多くあるが、時代の状況も踏まえながら、対象に合った施策を検討いただきたい。(関口委員)
- P.62の図で、医療サービスのニーズは一定となっているが、一般的には医療サービスニーズは高齢者の増加に伴い今後増加するという見方のため、その意図を確認したい。(坂本委員)
 - 作成者である後藤委員の意図を確認した上で、修正について検討したい。(事務局)
- 最後の取組の方向性においては、今回示された方向性を高齢者以外の世代にも広げていく旨を報告書に記載いただきたい。(関口委員)
- 共生社会に向けた布石として、今回は高齢者に着目して検討を行っているが、他市町村では社会援護の領域から連携を進める取組も出てきている。川崎市にはフロントランナーとして、全世代的な取組に向けて頑張ってください。また、バックキャストの重要性についての言及があるが、バックキャストはより長期的に将来を見据えて考えることを指すのではないかと。中長期的に検討する記載が後段に出てきているため、同じ趣

旨であれば読み取りやすいように工夫してはどうか。(秋山委員)

- 柴田委員が言及された若い世代の参加は、高齢者に喜ばれ参加率の向上に繋がる効果がある。一方で、若い世代が参加し続けたいくなる仕組みづくりが必要である。住民主体であるからこそ多様な関わり方が可能になるということがあるため、住民の工夫次第で取組を拡大できる可能性がある。(秋山委員)
- まちづくり局の会議に参加し、市営住宅における孤独死の多さを認識した。福祉施設で看取るといった表現になりがちであるが、見守り機能は地域の方が出せる場所であり重要な要素であると思う。可能であれば要素として入れていただきたい。(柴田委員)

6. その他

本日の意見について最終報告書案へ反映の上、近日中に委員に対して最終報告書案の確認依頼を行う。

以上